

2022年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	19世紀におけるピアノ協奏曲の少人数演奏形態の再現研究 —室内楽版の演奏から見える「ピアノ協奏曲」の本質—
キーワード	① ピアノ協奏曲の室内楽版、② 作曲当時の再現演奏、③ 室内楽編曲の比較

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	テツ ユリナ 鐵 百合奈
配付時の所属先・職位等 (令和4年4月1日現在)	桐朋学園大学院大学 音楽研究科・専任講師
現在の所属先・職位等 (令和5年7月1日現在)	三井住友海上文化財団・派遣アーティスト
プロフィール	2019年、N&FよりCDデビュー。同年よりベートーヴェンのピアノ・ソナタ全曲演奏シリーズを開催、NHKからドキュメンタリーが放映される。並行して録音を行い、2022年《ベートーヴェン ピアノ・ソナタ全曲集上巻》(CD5枚組)、2023年に同下巻を発売、両巻とも「レコード芸術」で特選盤となる。多くのリサイタルを開くほか、読響、東響、広響、東京シティ・フィルなどオーケストラとの共演も多い。日本音楽コンクール第2位、岩谷賞(聴衆賞)、三宅賞。高松国際ピアノコンクール審議員特別賞。2015年、皇居内桃華楽堂で御前演奏。第4回柴田南雄音楽評論賞本賞、第5回同本賞。ヤマハ音楽振興会、よんでん文化振興財団、岩谷時子 Foundation for Youth、宗次エンジェル基金、各奨学生。東京藝術大学にて博士号取得。2020年～23年、桐朋学園大学院大学専任講師。

1. 研究の概要

当該研究の題材である「ピアノ協奏曲」の演奏には、オーケストラを含め総員60名程度を必要とする。CDプレーヤーや動画ツールのなかった19世紀において、ピアノ協奏曲を家庭で鑑賞する際、ベートーヴェンなどのピアノ協奏曲は他の作曲家によって「室内楽版(5名ほどで演奏可能な楽譜)」が作成されて親しまれてきた。現代では珍しいものとなった、この少人数での演奏形態の再現を通して、社会背景と結びつけながら「ピアノ協奏曲」の持つ性質が、作曲当時から現代にかけてどのように変化したのか考察する。再現演奏に際しては、室内楽奏者はピリオド楽器(当時の楽器、古楽器)に精通した演奏者に依頼した。弦楽器奏者が各自、ベートーヴェンが生きていた頃の弓を持参するなど、モダン楽器を用いながらも当時の演奏感覚に近付けることができた。

2. 研究の動機、目的

ベートーヴェンが書いた5曲のピアノ協奏曲のうち、第4番のみ室内楽版が(ごくまれであるものの)演奏される機会があり、しかも複数の編曲のバージョン(編纂者が違う版)が存在する。第4番以外も室内楽版で親しまれていたと考えられるなか、なぜ第4番のみ編曲のバー

ジョンが多いのか。第4番の室内楽版が音楽研究者によって注目される理由は、ベートーヴェン自身が残したソロパート譜への追加の書き込みに端を発する。この「追加の書き込み」については研究者によってさまざまな解釈が存在する中、本研究ではキューテン氏が主張する「第4番を室内楽版で演奏する際に、オーケストラの響きをソリストが補填した」との説を取り上げ、実際に演奏再現することで考察を試みた。

【図1】



図1 ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第4番（キューテン版）の再現演奏の写真

【図2】



図2 ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第3番（ラトナー版）の再現演奏の写真

3. 研究の結果

ベートーヴェンの時代、さらにポスト・ベートーヴェンの時代にどのように「ピアノ協奏曲」というジャンルの音楽が楽しまれていたかを再現演奏で体感することにより、「ピアノ協奏曲」の本質を見た。再現演奏にあたっては、残された手稿譜やキューテン氏による手書き譜（私家版）を浄書し、さらに他の編曲版（デル・マー氏による校訂）とアーティキュレーションに至るまで詳細な比較研究を行った。これにより、ベートーヴェン自身が残した書き込みは（キューテン氏が主張するように）室内楽に相応しいとの体感は得られず、むしろキューテン私家版でのみ見られるアーティキュレーションによって、指揮者なしでのセッションが可能となったと言える。

4. 研究者としてのこれからの展望

楽譜だけを見ていては、机上の空論になりかねませんが、この度は実際に演奏形態を含めて編曲譜面の演奏を再現できたことで、実感を伴う検証ができました。当該研究の特色は、演奏者自らが研究を行う点にあります。従来の音楽分析において、「演奏」の視点が十分に考慮されてこなかったことを問題視し、今後も演奏者の立場から、分析における演奏的側面の重要性を見つつ、積極的に諸説の比較と検証（実際に演奏するなど）を伴う研究を行っていきたいと思っています。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

この度は当該研究に対して多大なご支援を賜り、感謝申し上げます。「ピアノ協奏曲」というジャンルは、演奏に際して60人規模の奏者を必要とするため、演奏するだけでも膨大な予算を必要とします。本研究で「ピアノ協奏曲の室内楽版」の楽譜の復元を行ったことで、6人という比較的少人数での演奏が可能となりました。少人数でのピアノ協奏曲の演奏は、まさに19世紀の一般的な演奏形態でもあります。今日では一般的でなくなった「室内楽版でのピアノ協奏曲の演奏」を再び広めることで、ピアノ協奏曲の演奏検証を行いやすくし、より「ピアノ協奏曲」のジャンルの研究が発展することを願っております。